

限られた授業時間を

生かす指導の工夫

大阪教育大学名誉教授

中西 一弘
なかにし かずひろ



指導計画の第二案として

国語時数の大幅な削減にもかかわらず、いやそれ故にといった方がより正しいのであるが、国語学力の保障をめぐり、現行の国語教科書には、これまで以上にいくつかの工夫を加えている。だが、百時間という量的な減少は、質における大きな変化を免れることが不可能である。つまり、従来の取り扱いでは、工夫が生かされない恐れがある。したがって、単元の構成や時間配当について、柔軟で現実的な手当てが不可欠になる。前号に続いて、そのための一つ、二つの具体例を提案してみよう。(単元・教材ごとの「主な学習事項」や「言語活動例」は指導書に示されているので、「こ」では省略することにしてたい。)

二年下 六 本は友だち 「スーホの白い馬」

二学期までに、読む練習はすでに重ねられているので、その読字力を生かして、自分で書くという学習が多く設けられている。文字を書くことで目だけではなく、体で学ぶことが目ざされているわけだが、その場合にも、読む活動を適宜挿入して、読み書きのバランスをとりたい。幸い、二月には第五単元に「楽しかったよ、一年生」という思い出を文集にまとめる学習が位置づいている。この「楽しかったよ」という思い出となる絶好の学習が、実は、まだ残されている。本単元がそれである。

「スーホの白い馬」は、楽しい物語教材であるから、この読みの「楽しみ」も、文集の中に入れたい。幸いなことに、第五単元では、配当時間が十六時間もある。前半の八時間で教科書の指示どおりの作業をして、書くことの「こ」を習得させておき、残りの八時間を「スーホの白い馬」の配当時間に加える。合計十七時間もあれば、総仕上げの活動ができる。

もちろん時間があるからといって、従来のような読みばかりの学習をするわけではない。起伏に富んだストーリーなので、場面ごとに声に出して読みたい文や段落をプリントに視写させ、選んだ理由を一言でもいいから、記入させておく。ついでに、友達を選んだ文で、自分が気

に入ったものも書き加えておく。(毎時、10分間)

場面ごとに、一文の視写と感想があれば、最後には、ほぼ十文の視写と十文の感想で、確実に二十以上の文にふくれあがる。それに友達のもの(二人か三人のもの)がつけ加わると、三十文以下になることはない。全場面の学習終了時にはこれだけの材料ができています。

あとは写すだけなので、一時間もあれば下書きは完成。清書に一時間もかければ、思いつ文集の最後を飾る「力作」ができあがる。(17-2=15 読みの時間)

読みの学習において、ほんのちよつとした記述作業を入れるだけで、十時間ほどかけて仕上げる作文と同じ分量の作文が仕上がる。「書くこと」の学習を実際に、しかも一人の落ちなくできる形で実施しているのだから、「書くこと」の時間をいいただいてもかまわないだろう。

時間をかけて「読むこと」と「書くこと」が苦勞なしにできたのだから、続く「本は友だち」の活動はわずかな時間でも、応用・発展として可能になるはずである。

三年下 自分でえらんで「モチモチの木」「虫のゆりかご」

特集の中で紹介されているほかにも考えられる「自分で選んで」の扱い方を提案してみる。

ここでの学習は「自分でえらんで」が主眼である。二

後、発表したい挿絵を自分で選んで、分担当を決める。分担当した挿絵について、冒頭から順に関係する本文を使って挿絵の説明をしていく。全文は、二、三度しか目を通さないが、それだけ友達の発表に注意してくれる。

「自分でえらんで」を、「このように」学習の観点を決めて、部分を選択させる方法にすると、自力で学習できた、という実感を与えることができる。

四年下 自分で選んで「いんぎつね」「動く絵の不思議」

この二教材も組み合わせて学習させると、両者とも学習することができる。「動く絵」の原理でアニメも映画もできているので、それに着眼する。アニメになった「いんぎつね」のほんのわずか、たとえば冒頭だけを見せることから始める。そして、こま送りの操作によって、ごく自然な動きが、実は、少しずつ変化した画像の連続で作らせていることを知り、それが目のもつ「残像」効果によることを、説明文「動く絵の不思議」で確かめる。二、三時間で済ませて、残りの一、二時間を読みに費やす。学習済みの知識を生かして、読む前に「アニメ映画『いんぎつね』の製作者になろう」と課題を設ける。どの部分を選んで、どのような連続の絵を描いてアニメにするか考えて、みんなで力を合わせて作ろう」と計画する。

教材なのでどちらかを選ぶことになる。例えば、両方の挿絵を眺めて両方ともおもしろそうだと、どちらも勉強してみたい、という三年生がいる場合を考えてみる。好奇心旺盛な児童にとつて、どちらも読んでみたいというのが普通であろう。児童の好みをよく知る教師にとつても、そう考えるに違いない。それを可能にするにはどうすればよいか。自ら選ぶという学習の趣旨も生かしながら読むことに重点を置いた扱い方を考えてみよう。

ここでの学習には十四時間が配当されている。そのうち、十時間を当てて読みの練習を重ねていく。「モチモチの木」は楽しいお話なので、いくら読み返しても飽きはない。(説明文では「つはいかない」)その、各場面の読みにおいて、いつも挿絵との関係に注目させておく。挿絵から読みを始めることがあってもよい。こつして、映像(絵+画家の本文解釈)と言葉(本文)との深い関係に目を開くように指導していく。この場合、挿絵の説明役を指名ではなく自己推薦の形で、つまり「自分でえらんで」行うように誘う(説明の前に、見つけたこと、思ったことをメモ風に書かせておく)。児童の好む課題なので、教師も驚く指摘がある。学力差も心配ない。

挿絵と言葉との関係に気づいた三年生なら次の「虫のゆりかご」でも、さっそく活用してくれるだろう。範読

分担当を決める、という目的を持って、「いんぎつね」の読みに入る。

「いんぎつね」の「一」で作業を始める。だが、どの動きを分担当するかを決めて、「ごく簡単なスケッチを描く。数枚に限り、あとは想像させる。全員ものを繋いで組み立てる。ちよつとした動きでも何枚もの絵があるので、とびきり印象的な動きにしほる必要がある。そのため繰り返し読んでいく。絵を描くこととは「一」の手段であつて、「ごくごく簡単なスケッチでいい。その手段があるために普通とは違った角度と興味と緊張とで読み、想像し、話し合いながら自分の読みを反省していく。それがねらいである。全場面する必要はない。

五年下 自分で選んで「大造じいさんとガン」「月夜のすみずみ」

ここでは、放送劇にする、という計画を立てる。物語のクライマックスだけでも劇にして役割分担当を決めて音読発表をする。その経験を生かして、詩も連ごとに分け、さらには行ごとに味わって自ら分担当者となる。工夫したことをメモし、それも加えて、全員で発表していく。